

# 南三陸ノート（5）

— 震災復旧の節目としての2016年 —

杉田 孝夫

はじめに

1. 南三陸町地方卸売市場の完成
2. 志津川ICの完成の意味
3. 南三陸さんさん商店街の閉鎖
4. 仮設住宅から高台移転へ
5. 戸倉地区の状況

むすび

## はじめに

戸倉小学校が、被災時の場所から1km内陸の高台に新築移転し、2015年10月から授業が始まったことは、戸倉地区の住民にとっては大きなよこびであり、復旧の一つの節目として意識されたであろうことは想像に難くない。それまで志津川小学校に間借りして、子どもたちはスクールバスで仮設住宅から通学していた。それもやっと終わった。戸倉小学校に隣接して、子育て支援センターと放課後児童クラブも併設されている戸倉保育所も完成した。併せて造成が進められていた戸倉地区防災集団移転団地も完成し、戸倉地域の人びとにとっては、新しい生活のスタートを象徴するものであった。ほぼ前後して歌津地区でも子育て支援センターと伊里前保育所が子育て支援拠点施設として完成した。

2015年12月14日に南三陸町病院が開院したことは、町民が待ち望んでいたことであった。小規模ながら震災前の公立志津川総合病院とほぼ同規模であり、

かつ旧来の病院と異なり、総合ケアセンターが併設され。保健センター、地域包括支援センター、子育て支援センター、南三陸町保健福祉課が入り、南三陸町の医療、保健、福祉のセンターを一カ所に集中させることになり、三部門の有機的な運用が可能になったことは、住民にとって、日常生活の大きな安心のよりどころができたという意味で復旧の大きな指標であるといえる<sup>1</sup>。

2016年度は、魚市場の完成や、志津川インターの完成、平地嵩上げ工事の終了に伴う「南三陸さんさん商店街」の閉鎖と商店街本設、仮設住宅から高台の団地への移動と、基本インフラと生活基盤の完成が相次いだ。たしかに2016年度は目に見えるかたちで復旧復興過程の大きな節目の年となったといえる。そこで本稿では、過去5年間の定点観測をもとに、中間考察を試みる。

1 詳しくは拙稿「南三陸ノート」(4)『地域総合研究』第9号(2016年3月)115-126頁参照。

## 1. 南三陸町地方卸売市場の完成

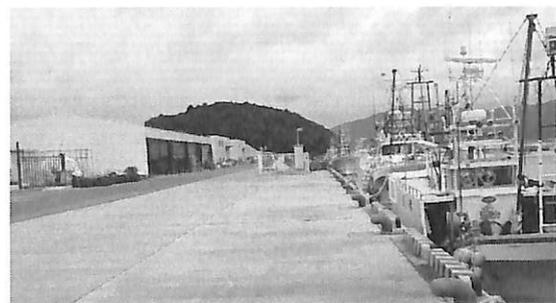
2016年は、インフラ整備の面で、今後の復興を考えるうえで新たな進捗があった。第一は、6月1日に南三陸町地方卸売市場が旧魚市場跡に完成したことである。震災の年の2011年11月に仮設市場を完成させて運用してきたが、年々水揚げ高も回復基調に入っており、2015年度の取り扱い量、金額ともに震災前の水準に戻っている。新しい市場は国際的な食品衛生管理方式ハサップ（HACCP：Hazard Analysis and Critical Control Point）<sup>2</sup>に対応して高度衛生管理型施設であり、入場前に体を消毒する滅菌室、汚染源を入れないシャッターや防鳥ネット、排気ガスのでない電動リフトなどが導入され、さらに鮮度維持のための水温を自動調整する水槽、塩分を含んだシャーベット状のスラリーアイス<sup>3</sup>を作る製氷機（アイスジェネレータ）、作業効率を高めるサケ選別機なども導入されているという。宮城県の拠点漁業港の一つとしての今後の発展の土台となる施設が完成したといえる。



南三陸地方卸売市場 2016年9月11日



仮設魚市場から見た南三陸地方卸売市場  
2016年9月11日



震災の年の秋から使われてきた仮設魚市場  
2016年9月11日

2 HACCPとは、食品の製造・加工工程のあらゆる段階で発生するおそれのある微生物汚染等の危害をあらかじめ分析し（Hazard Analysis）、その結果に基づいて、製造工程のどの段階でどのような対策を講じればより安全な製品を得ることができるかという重要管理点（Critical Control Point）を定め、これを連続して監視することにより製品の安全を確保する衛生管理の手法である。この手法は、国連の国連食糧農業機関（FAD）と世界保健機関（WHO）の合同機関である食品規格（コーデックス）委員会から発表され、各国にその採用を推奨している。

([http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/shokuhin/haccp/](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/shokuhin/haccp/))

厚生労働省はHACCPを広めるために、HACCPに取り組む食品等事業者をウェブサイトで自己申告に基づいて公表する「HACCPチャレンジ事業」を推進している。2017年1月現在登録事業者数は305件である。

(<https://www.n-shokuei.jp/haccp/>)

3 スラリーアイスとは、微小な氷粒子と塩水等の液体が混ざりあった流動性のある氷のことで、長所は、1) 微小な氷粒子が魚全体を包み込むので、碎氷に比べ急速かつ均一に冷却することができ、鮮度低下を遅らせる。2) 氷による魚体表面の傷や変形が少なく、身焼けや身割れも防ぐので、商品価値を高めることができる。3) 附属のホースから排出されるので、水を運ぶ手間がはぶけ、出荷作業がスムーズに行えるという点にある。製氷の工程は、まず海水を海水殺菌装置に通し、つぎに塩分調整装置で清水を加え、原水タンクに移し、原水タンクからポンプでアイスジェネレータに移す。アイスジェネレータは貯水タンクと製氷機・冷凍装置とから構成されている。でき上がったスラリーアイスは、貯水タンクから冷却タンクに移され、出荷作業場で、冷却タンクにつないでいるホースから排出される。

(<http://www.izuitekou.co.jp/slurryice.html>)

## 2. 志津川 IC の完成の意味

第二は、10月30日登米市の三滝堂ICから志津川IC間9.1kmが開通したことである。これまでは国道398号線を西に向かい、登米との分水嶺である水塚峠のトンネルを超えてすこし下って三滝堂IC（2016年4月16日開通）から三陸道に入っていたが、さんさん商店街から国道398号線沿いに西に走ってすぐに志津川ICに入ることになる。震災前は登米東和IC（登米IC-登米東和間は2010年3月22日開通）で降りて国道398号線で水塚峠のトンネルを超えて志津川に入った。登米・志津川間は25.5kmおよそ30分の距離である。仙台・石巻と志津川を往復するのであれば、桃生津山インターを降りて、柳津から国道45号線で志津川に向かうというルートが一般的であった。石巻・仙台方面に向かうルートとして、戸倉の住民にとっては、従来通り国道45号線で柳津に向かい桃生津山ICで三陸自動車道に入るほうがいまでも便利かもしれないが、入谷はもとより志津川や歌津の住民にとっては、時間的にも距離的にも、なによりも気分的に志津川インターを利用したほうが、便利であろう。志津川の旧市街のはずれの小森（3.11の津波浸水域はこの地域まで及んでいる）に高速道路の出入り口ができたという点で、南三陸町が全国的高速道路ネットワークにダイレクトにつながったわけであり、今後の復興に向けての町づくりにおいて、その意義を有効に生かす知恵が求められるであろう。

志津川IC以北の完成予定は、志津川IC～南三陸海岸IC（3km）が2016年度内、南三陸海岸IC～歌津IC（4.2km）が2017年度、歌津IC～歌津北IC（4.0km）が2018年度（国土交通省東北地方整備局道路部）ということである。震災から10年後の2021年には気仙沼まで高速道路でつながることになる。こうした事業は、震災後「復興道路 三陸沿岸道路」計画として位置づけられ、岩手、宮城両県の国道45号線沿の沿岸で並行して進められている（付 図2 復興道路計画全体図 参照）。自動車道路計画はそうとう前からあり、一部は震災前から工事も進められ

ていたが、震災後工事の進捗状況が良くなった。復興道路として位置づけられたからにはほかならない。震災から10年後つまり2021年ころまでには仙台から八戸まで沿岸地域が高速道路でつながることになる。八戸で東北自動車道と接続するが、八戸以南では、盛岡宮古横断道路、東北横断道路釜石秋田線（花巻遠野間は完成し、遠野釜石間の工事が進められている。花巻から北上を經由して横手・秋田につながるルートはすでに運用されている）、相馬福島道路の建設が進められている。また登米ICから東北道に接続するルート計画が具体化してきているようである。これによって南三陸地域から宮城県北部・岩手県南部の東北道沿線地域への連絡が従来よりも格段によくなるであろう。震災後のこの事業のスピードの早さには驚かざるをえない。

もし震災がなければ、財政赤字とコンクリート事業に対する視線がきびしい状況のなかでは、優先順位の低い公共事業リストのなかに置き去りにされた可能性が高い。

海岸線に並行して走る東浜街道や国道45号線は大津波によって各地で寸断されてしまった。他方仙台東部道路や三陸自動車道は浸水の防壁の役割を果たした。国道45線に並行してさらに山側に自動車道路があれば、大震災や大津波のときの避難および救援のための輸送・移動のルートとして使えるという存在理由のあらたな発見があった。日本の道路の多くは、旧街道がそうであるように、南北の線になっており、（本）街道と裏街道あるいは脇街道というように回り道が複数平行して走っているが、それらを東西につなぐ道路はそれほど発達していない。あるいは十分に整備されているとはいいがたい状況にあった。

そのために分断された被災地と迅速に連絡をとることができなかった地域も少なからずあった。こうした反省から「梯子」あるいは「櫛の歯」のように南北の幹線同士をつなぐ東西の幹線道路の必要性が再認識されたのも今回の震災経験の成果の一つであ

る。実はこうした東西のルートは、地域の内部を見れば、古くから存在してきたことに気がつく。それでもやはり南北のルートに対して、東西のルートは圧倒的に少なく、状態も劣る。

今回の震災で岩手県遠野市が内陸と沿岸を結ぶ救援ラインのハブのような役割を演じたが、このような救援拠点を何方か設定して、それに必要なインフラの整備を進める必要があるということは、今回の震災から得た教訓の一つである。花巻-遠野-釜石を結ぶ自動車道路や盛岡-宮古を結ぶ自動車道路の建設が急ピッチで進められていることによる。こうした動向の中で、宮城県北高速幹線道路の計画が一昨年公表された。三陸道登米ICから西に中田・佐沼・若柳・加倉をつないで東北自動車道および国道4号線に接続する新ルートである。

これによって南三陸町から東北道に極めて短時間で接続できるようになる。震災直後は国道4号線および東北道から国道398号線が佐沼・登米を中継地にして南三陸との連絡路として大きな役割を果たしたが、将来は、国道398号線と並行して三陸道およびこの宮城県北高速幹線道路が内陸との連絡道路として中心的役割を果たすことになるであろう。これによって宮城県内では沿岸の高速道路と東北道を東西につなぐ自動車道路が、すでに運用されている仙台南部道路、仙台北部道路について3本目の連絡道路ができることとなる。佐沼、登米地域は蛇行する北上川や伊豆沼や長沼など多数の沼地があり、道路はそれらを迂回するように走っているため、随分と回り道を余儀なくされていた。東北道や国道4号線へのアクセスがその分だけ劣っていたわけだが、この自動車道路の完成によって利便性が大幅に向上することになる。近隣地域間の往来にとってはその意味はあまり感じられないかもしれないが、より遠方の地域との連絡という観点に立てば、画期的な変化

である。緊急時の連絡路としてだけでなく、平常時であればとくに広域的なツーリズムの拠点として南三陸を位置づけることが可能になる。また海産物や農産物などの輸送の便が飛躍的に高まることが期待される。

自動車道路の開通によって、南三陸町の産業立地の条件も大きく改善されるといえるのではないだろうか。人口減少におびえているだけでは問題は解決しない。持続可能な南三陸町に切り替えていくためには、こうした震災を契機にして生まれたインフラ環境の大きな変化を、利点として読み替え、社会的財を有機的に結びつけて地域生活の新たな可能性を産み出す条件として設計していくことが求められているといえる。「危機は好機」という言葉が改めて思いおこされる。

高規格の卸売市場が完成し、近くのインターチェンジから高速道路を利用してすぐに全国に出荷できるようになったということの意味は大きい。かつては交通の便の悪さや市場機能の脆弱さから、石巻港や気仙沼港で水揚げされていたものが、地元で水揚げしてすぐに出荷できるようになったわけである。港の規模がそもそも石巻や気仙沼よりは小規模なので、大型漁船の入港は考えられないにしても、近海物や沿岸物・内湾物の水揚げに関して、この効果が今後どの程度あらわれてくるのかは興味深いところである。

交通インフラの復旧復興という点では、BRTが2012年12月22日に運行を開始してからすでに5年が経ち、すっかり地元の生活に馴染んでいるようにも見えるが、他方でまだ気仙沼線の復活を望む声がある。しかしこれも気仙沼まで三陸自動車道路がつながるようになれば、おそらく復活を求める声は消えていくのではないだろうか。

### 3. 南三陸さんさん商店街の閉鎖

節目を意味する第三の点は、2012年2月25日にオープンした仮設商店街「南三陸さんさん商店街」が

2016年12月31日をもって閉鎖されることになった。オープンした当初は、心細いほどの見通しの立たな

図1 三陸沿岸道路 宮城県区間



H28.10.30時点

路線名	計画延長	供用中	事業中	うち
				H23補正新規
三陸沿岸道路	359km	167km	192km	148km
うち宮城県	126km	85km	41km	23km
三陸沿岸道路 4車化	52km	40km	12km	12km

出典：国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
<http://www.thr.mlit.go.jp/road/fukkou/content/province/miyagi/>

さのなかで始まった商店街であった。しかし海から2km離れた仮設商店街は、鉄骨だけが残った防災対策庁舎とともに、3.11のシンボルとして多くの訪問者を集めた。この5年の間、その果たした役割は大きい。商店街の閉鎖は、まぎれもなく新しいステップへの区切りである。商店街予定地となっている嵩上げされた造成地で、2017年1月6日、本設商店街の建物の起工式が行われた（すでに2016年7月6日に造成地の起工式が行われた）。2017年3月3日に新商店街がオープンする。そのための閉鎖である。新商店街は平屋建て6棟、総事業費7億、国が5億

を助成するということである。さんさん商店街の32店舗中23店舗が移転し、ほかにコンビニや飲食店が5店舗入るということである。場所は、上の山緑地の下、旧五日町から旧十日町にかけてのあたりで、商店街のなかに道の駅もできる。八幡川を挟んで震災遺構の防災対策庁舎に近い。国道398号線と国道45号線が交差する地点にも近い。今後の志津川の町づくりの中心がようやく目に見えるかたちで基礎づけられたという意味では、やはり復旧復興過程の大きな節目を象徴するものである。



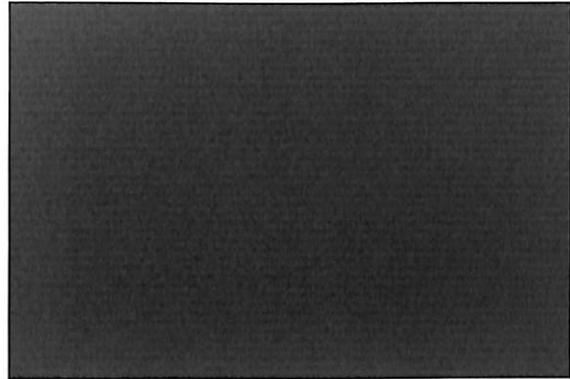
さんさん商店街駐車場、奥がさんさん商店街  
2016年9月12日



さんさん商店街駐車場の脇にある観光客記念撮影ポイント  
中央はシンボルのモアイ像 奥はポータルセンター  
2016年9月12日

役場で、復興市街地整備課の吉田昇主事と企画課政策調整第2係主事阿部克浩さんに今後の見通しを聞いた。商店街の本設や道の駅のほかに、スーパーマーケット、ドラッグストア、ホームセンターなど10件の引き渡しがあるというから、2017年はいよいよ生活関連の商業区域が活動を開始することになる。また新しい高台移転地でのコミュニティ作りに関連して、計画後のプロセスのなかで、団地の空き区画や災害公営住宅の空き部屋が発生する可能性があるが、それについては、罹災証明のある希望者を優先しつつも、一般住民にも希望があれば対応することや、すでに50年が経過して老朽化している町営住宅居住者に災害公営住宅への移動を認めることなども検討しているということである。

こうしたなかで、これまでプレハブで凌いできた町役場と歌津総合支所の新しい庁舎の建設も始まった。2016年3月24日に地鎮祭がおこなわれ、2017年



南三陸町復興市街地整備課主事の吉田昇さん（右）と  
企画課主事の阿部克浩さん（左） 2016年9月12日

9月末完成予定で、建設工事が進められている。役場新庁舎は、沼田の志津川東地区にある公営住宅や南三陸病院に隣接して建設される。歌津総合庁舎は平成の森の現在仮設住宅がある敷地（旧グラウンド）の端に建設される。この話を2015年12月に聞いたときは、庁舎は最後の最後までよいのではないかという気分も湧いたが、それは嵩上げ工事と高台移転地造成工事のダンプカーの往来と土色の風景に馴染んでいた目にそう映ったのだろう。それから一年経ってみると、復旧復興の折り返し点としてそれなりに納得できるところである。それほどこの一年あまりの間に重要インフラの完成が相次いだ。

交通インフラや港湾施設の基盤整備は整い、嵩上げも済み、街の輪郭も見え始めてきた2016年であったが、人びとの生活拠点となる高台移転地の様子はどうなっているのだろうか。



現在の役場仮設庁舎側からみた南三陸町役場新庁舎  
建設工事現場（沼田）。右奥は東団地。  
道路の右側に南三陸病院がある 2016年9月10日



歌津総合庁舎建設現場（平成の森仮設住宅の入口付近）  
2016年9月11日



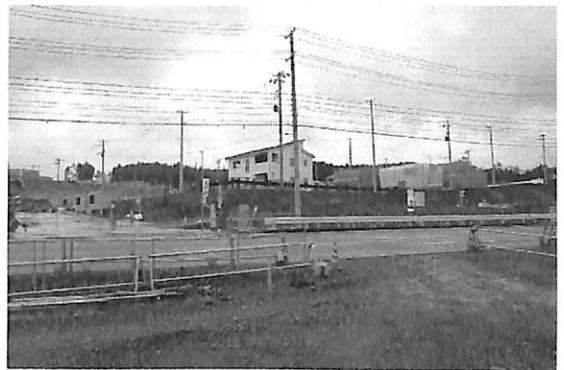
歌津総合庁舎新築工事現場と平成の森仮設住宅  
2016年9月10日

#### 4. 仮設住宅から高台移転へ

仮設住宅は2011年8月末までに整備完了し、戸数は2,195戸作られた。町内52カ所1,709戸と町外（登米市）に6カ所486戸であった。2011年9月7日現在で入居世帯総数は2,148世帯、入居者総数5,750人であった。2014年5月20日現在のデータでは、仮設住宅戸数に変化はないが、入居総戸数は1,959戸、入居世帯総数1,727世帯、入居者総数4,951人となっている。2015年9月28日現在での仮設住宅戸数は、町内52カ所1,668戸、町外6カ所486戸の合計2,154戸に対して、入居戸数は、1,516戸、入居世帯数1,321世帯、入居者数3,718人であった。2016年7月25日現在のデータでは、応急仮設住宅については、町内52カ所1,668戸と町外6カ所486戸であるが、入居世帯数は987世帯、入居者数2,723人（町内759世帯2,192人、町外227世帯531人）となっている。直近の2016年10月31日のデータでは、仮設住宅戸数は町内52カ所1,647戸、町外（登米市）6カ所486戸で、入居世帯総数777世帯、入居者総数2,277人（町内603世帯1,837人、町外174世帯440人）となっている<sup>4</sup>。

こうした動向は、住宅造成工事の進捗状況に対応するものであり、現在急ピッチで工事が進んでいることを証明するものでもある。2016年8月1日現在で、防災集団移転促進事業の完成率はおよそ81%の

ところまで進捗しており、20地区28団地827区画の計画のうち、すでに18地区24団地672区画が竣工している<sup>5</sup>。



志津川地区中央団地の国道45号線沿 家が建ち始めた  
2016年9月13日



南三陸病院エントランスから見た東団地（東工区）  
災害公営住宅 2016年9月13日

4 南三陸町内の防災集団移転促進事業20地区28団地、災害公営住宅制時事業8地区の位置については、拙稿「南三陸ノート」(3)『地域総合研究』第8号72頁の図1の計画図を参照されたい。

5 2016年11月1日現在のデータでは、防災集団移転促進事業の完成率は約94%にまで達しているが、災害公営住宅整備事業の完成率は約46%のままであり、若干予定よりも進捗が遅れている。



東団地（西工区）の災害公営住宅  
右手にベイサイドアリーナや町立図書館がある  
2016年9月10日

進行中の防災集団移転促進事業<sup>6</sup>の対象地は、志津川地区東団地（140区画 一部完成）志津川地区中央団地（135区画うち83区画完成）、志津川地区西団地（70区画うち40区画完成）を残すのみとなっている。災害公営住宅整備事業<sup>7</sup>の完成率は約46%で、8区画738戸の計画のうち、すでに5地区340戸は竣工しており、災害公営志津川東住宅（265戸うち95戸完成）、災害公営志津川中央住宅（147戸）、災害公営住宅西住宅（82戸）を残すだけとなっている。戸倉地区、歌津地区ではすでに両事業は完了し、新たな生活の拠点形成がはじまっている。因みに志津川地区にも上記の大規模団地のほかに、沿岸の浜の集落ごとの小さな団地が高台にある。袖浜団地（5区画）、平磯団地（6区画）、荒砥団地（6区画）、西田・細浦団地（19区画）である。

戸倉地区には戸倉団地（84区画）と災害公営戸倉住宅（80戸）は規模が大きいが、ほかには西土団地（7区画）、波伝谷松崎団地（19区画）、波伝谷団地（13区画）、津の宮台羽沢団地（7区画）、津の宮団地（6区画）、藤浜団地（10区画）、長清水団地（8区画）と小規模である。

歌津地区では内陸高台に中学校上団地（51区画）災害公営伊里前住宅（60戸）、栢沢団地（53区画）、

災害公営栢沢住宅（20戸）のほか、堺団地（7区画）、長羽団地（7区画）、田の浦団地（23区画）、石浜・名足団地（7区画）、災害公営名足住宅（33戸）、名足保育園南団地（9区画）、生活センター西団地（14区画）、泊浜団地（8区画）、館浜団地（19区画）、寄木・葦の浜団地（40区画）と小規模である。

仮設住宅は、2011年9月に入居世帯は2,148世帯あったが、2016年10月には777世帯に減少し、入居者数は、5,750人から2,277人に減少している。とくに2015年以降急速に減少傾向にある。仮設住宅滞在期間は当初3～4年と想定されていたことを考えれば、震災から6年経ってもなおこれだけの人数の住民が仮設住宅での生活を余儀なくされているのは、規模の大きな高台移転地造成や公営住宅建設が計画よりも幾分遅れていることによるものと考えられる。実際、2014年から2015年にかけての仮設住宅居住世帯の減少は、沿岸の入江や浜ごとの集落の小規模な高台移転がいちやく完了したことと関連すると考えられる。2015年以降仮設住宅から高台移転地への転出の速度が早くなってきていることが、データからも読み取れる。



平成の森仮設住宅と新築の家々が立つ栢沢団地（中央奥）  
2016年9月10日

しかし他方でそれは、櫛の歯が欠けるように空き部屋が発生することを意味する。近い将来の計画と

6 防災集団移転促進事業とは、災害が発生した地域または災害危険区域（建築基準法第39条）のうち、住民の居住が適当ではないと認められる区域内の住居を安全な住宅団地へ集団移転させるための促進事業であり、住宅の集団移転先として、町が高台や造成地などに住宅団地を整備し、被災した町民に譲渡または賃貸するものである。以前住んでいた場所は、移転促進区域に指定され、商工業用地や公園としての利用はできるが、住宅の立地はできなくなる。

7 災害公営住宅は、東日本大震災により住宅を失い、自力で住宅再建が困難な人のために町が建設した公的な賃貸住宅であり、通常の公営住宅とは異なり、入居資格として収入要件や同郷親族要件は必要なく、家賃は世帯の収入や住宅の広さによって決まる。

転出を考え、意図して残っている比較的若い世代の世帯は別として、仮設住宅を出るに出られない事情を抱えている住民がいることも考えられる。一時的であったとしても一つのコミュニティと其中での生活が成立していたのに、メンバーが一人二人と抜けていくことにともない、残された者の心のうちに孤独感や将来への不安が生まれてくるであろうことは想像に難くない。とりわけ身寄りのない高齢者や単身者にとってはつらい状況のなかに置かれることになる。町では、空き家対策として、仮設住宅の集約化を昨年ころから検討し始めているようだ。これはやむを得ないことであろう。今後空き家の数は確実に増えつづける、しかし最後まで残ってしまう住民もいる。仮設住宅の耐用年数にも限度がある。仮設住宅の耐用年数は安全面からいってもせいぜい5、6年だと言われている。補修の必要経費を最小化するうえでも、防犯、安全面から考えても、集約化は一つの合理的選択肢である。残る人びとの気持ちを尊重し、精神的平安が確保されるような見守りとケアが必要とされるだろう。すでに町や社会福祉協議会、生活支援員が中心になって、一人ひとりの気持ちに寄り添う活動を行っているが、それだけではかならずしも十分ではないだろう。人と人との間の具体的な信頼関係が、人に生きる元気を与えるのではないだろうか。いつも心のどこかでちょっとだけでも気にかけていること、気にかけていることによって、緊急時の迅速な救援も可能になるのではないかとと思われる。コミュニティの中で生きるということはそういうことなのではないだろうか。

最近の仮設住宅の様子を知りたくて、平成の森仮設住宅の自治会長畠山扶美夫さんを訪ねた。平成の森仮設住宅は2017年3月に全世帯移動ということになったという。2016年9月10日現在で72世帯90戸225人が暮らしているが当初の4割になっており、正月までには2割を切るだろうという。90世帯のうち12世帯はベイサイドアリーナのそばの志津川東団地に移り、他は歌津の伊里前（中学校上団地と災害公営伊里前住宅）と柘沢に移ることになっているが、なお4～5世帯が未定だということである。8月27



平成の森仮設住宅自治会長 畠山扶美夫氏  
平成の森自治会事務所 2016年9月10日

日自治会解散セレモニーとして、夏祭りを行う予定だったがあいにく雨天だったので、ベイサイドアリーナで行った。自治会は、自治会費を徴せずに、3月まで続け、残務整理をするということである。9月11日で、震災から5年半、自治会活動は4年11ヶ月になるという。集約計画が実施に移されることになるが、対象となるのは4～5軒だが、おそらく吉野沢の仮設住宅に集約されることになるのではないかとの見通しである。仮設住宅は2017年春には解体され、もとのサッカー場に戻るということである。跡地の一隅に総合支所、保健センター、公民館、消防署ができ、魚竜館、図書館の管理も兼ねる施設になるということである。

こうして仮設住宅と仮設住宅自治会の時期が終わろうとしているが、移転後の新たなコミュニティ形成が課題としてあり、それにはなによりも若い世代のリーダーシップが求められるのであり、老年世代はそのサポート役になるべきだという見解を示された。単身老人のケアと見守りが大事であり、民生委員、社会福祉協議会、支援員が中心になって行っていかなければならないという認識を示された。また生活の場が震災前とは随分と異なってしまったので、震災前の学校上、学校下という行政区のままでは対応できない。新しい分布に従えば、伊里前災害公営住宅、中学校上団地、柘沢団地、団地下の国道45号線沿いという4つのエリアになる。4行政区というわけにも行くまいから、上・下の区分けを少しずつすることによってバランスをとって二行政区にするのが現実的ではないかという見通しである。いず

れにしても民生委員の担当区域、行政区の単位をどう設定するかは歌津の将来を左右する。その意味で、2017年3月、歌津の今後が見えてくると話してくれた。もう一つは、震災からこれまでの記録の保管の重要性を強調された。避難所と仮設住宅自治会の経験と記録を残し伝える事が携わった者の使命であると語った。

歌津の将来を考えるうえで気になるのが伊里前の福幸商店街の今後である。2011年12月に、小学校下に立ち上げた仮設の復興商店街は、いま、嵩上げ工事のために、海側に仮移転して営業をしている。2017年春には、嵩上げ工事が終了し、元の小学校学校下に、商店街を本設することになっている。どのような形で伊里前を復興させる核となっていくのか、志津川とはどのような相互的な関係をつくっていかうとしているのか、公共施設も大方平成の森に作られることになったし、JR歌津駅もなくなってしまった。住宅も中学校上団地や柘沢団地に移ってしまう。少ない商店だけでは有機的な発展可能性は生み出しにくい。地元の沿岸漁業や養殖だけは昔と変わることなく歌津の最大の強みであり続けているが、漁業と商店街との連携の程度も、外から見ている限りでは、なかなか見えてこない。地域の構造が震災前とは大きく変わろうとしているとき、どのような長期的展望を描けるのか考えてみる必要がある。そのなかで復興商店街の新しい可能性も見えてくるに違いない。これから5年のうちにその見通しを描き出すことがなによりも必要に思われる。それは高台移転をして新しいコミュニティを作っていく伊里前、柘沢の団地の住民にとっても他人事ではない問題である。

## 5. 戸倉地区の状況

南三陸町4地区のうち震災後の人口が微増ではあるが、増えているのが入谷地区、比較的減少率が少ないのが歌津地区であるのに対して、もっとも人口減少率が大きいのが志津川地区と戸倉地区である。戸倉と歌津はどちらも漁業を中心に生計を立ててき



歌津伊里前の三嶋神社から国道45号線をはさんで  
左が仮設の伊里前福幸商店街と伊里前湾  
右が嵩上げ工事中の旧仮設商店街エリア  
2016年9月10日



伊里前の浜 右端が福幸商店街 2016年9月10日



左が福幸商店街 中央は国道45号線 右は嵩上工事現場  
2016年9月10日

た点では類似しているが、この人口減少率の違いは何に起因しているのだろうか。

地理的にみれば、海岸線と海で戸倉・志津川は隣接してつながっている。三陸鉄道と国道45号線、国道398号線が並行して走り、柳津と志津川の間

位置し、半農半漁を中心とする地域であった。神割崎と椿島という観光資源の所在地でもある。西戸、折立、波伝谷、三戸辺、在郷は川沿いの平地がすっかり津波にさらわれてしまった。震災の後、戸倉の在郷に災害廃棄物処理施設が設置され、南三陸町内で発生した災害廃棄物がここに集められ、選別、洗浄、破碎処理がおこなわれ、碎石、盛土材などへリ

サイクルされ、復興工事に再利用された。その間、毎日ダンプカーが列をなして往来し、2013年3月まで毎日煙突から煙が出ていた。

表1をもとに2016年12月末現在の人口を2011年2月末、2013年12月末、2015年12月末の人口で割ってみるとそれぞれの減少割合が表2のように出てくる。

表1 南三陸町と4地区の人口動態

	南三陸町	戸倉地区	入谷地区	志津川地区	歌津地区
2010.12	17,687	2,421	1,906	8,211	5,149
2011.2	17,666	2,411	1,898	8,213	5,144
2011.3	17,063	2,296	1,884	7,823	5,060
2011.12	15,488	2,024	1,866	6,804	4,794
2012.12	15,192	1,953	1,860	6,661	4,718
2013.12	14,683	1,846	1,892	6,297	4,648
2014.12	14,169	1,727	2,028	5,845	4,569
2015.12	13,806	1,644	2,044	5,600	4,518
2016.12	13,529	1,573	2,068	5,385	4,503

いずれも当月末のデータ、南三陸町人口・世帯数（住民基本台帳）から作成

表2 地区別人口増減比

	南三陸町	戸倉地区	入谷地区	志津川地区	歌津地区
2011.2月比	-24%	-35%	+8%	-35%	-13%
2013.12月比	-8%	-15%	+9%	-15%	-4%
2015.12月比	-3%	-5%	+1%	-4%	-1%

2011年3月11日から2013年までは4地区とも人口は減少し、とくに志津川地区と戸倉地区の減少率は同程度に高い。入谷地区は2013年以降増加に転じ、歌津地区は2013年以降微減傾向にある。震災直後の2011年3月のデータと2016年12月のデータと比較すれば、戸倉地区は-723人、入谷地区は+184人、志津川地区は-2,438人、歌津地区は-557人である。戸倉地区の人口減少が際立っていることがよくわかる。この要因は何なのだろうか。震災直後の建物被害にヒントがある。罹災率は戸倉地区75%、志津川地区75%、入谷地区2%、歌津地区55%である（2011年4月3日現在 南三陸町調査）戸倉地区では戸倉小学校、戸倉中学校、戸倉保育所、戸倉公民館、自然環境活用センター、波伝谷地区漁業集落排

水処理施設など地区民の日常生活にとって中心となる公共施設がすべて甚大な被害を受けた。歌津地区でも歌津総合支所、歌津保健所、名足小学校、南三陸水産振興センターが甚大な被害を受けたが、無事に残った施設も多数あり、代替施設として運用可能であったが、戸倉の場合には他の地区とすこし事情が異なっていたのかもしれない。戸倉の住民が被災で受けた心理的なショックは歌津地区の場合よりもより深刻だったのではないだろうか。折立、長須賀、水戸部、波伝谷の被害は視覚的にも希望を失わせるものであった。その惨状は、震災後3年を経てもまだ残っていた。見た目にはなにか戸倉だけが復旧から取り残されているかのような印象さえ受けた。実際には復興に向けて他地域と同様に計画的に作業が

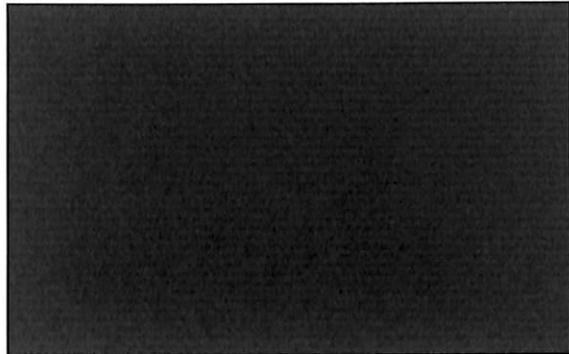
進められていたのではあるが、地元の仮設住宅で暮らす住民のなかには、復旧復興への希望よりも、この状態から早く抜け出したいという焦りにも似た思いが募ったとしても不思議ではない。比較的人口・世帯数のすくない地域であれば、そのような思いはすぐに全体に影響しやすいであろう。踏み込んだ検証を必要とすることがらではあるが、そうした印象を拭いがたい。そのような状況のなかで昨年来、戸倉小学校と保育所そして防集団地が完成したことは戸倉地域にとっては将来への希望の一步であるといえる。

最近の戸倉地区の様子を町議会議員の後藤清喜さんに尋ねた。後藤さんの生業は津の宮を基地とする銀鮭漁の漁師である。

戸倉の漁業は銀鮭の養殖が中心だったが、震災で従事者の三分の一が廃業した。養殖の状態は、震災前は密の状態だったが、三分の一に減らして、質の改善を目ざして生育状態がよくなった。業者数は減ったが生産高は震災前の水準に戻っているという。

農業は、震災後水田の耕作放棄が目立っている。在郷地区では表土をまかなかったので石ころだらけでまだ土に力がないが、西戸では表土をまき、農地改良をおこない、基盤整備をおこない、生産組合をつくってネギなどの契約栽培を大規模に再開している。地区によっては前に向かって歩み始めているところもあれば、まだまだのところもあるというのが現状のようだ。世帯数の減少のなかで、行政区の見直しも検討課題になっているという。そういうなかでも2015年からは戸倉地区の20世帯で「漁師の会」を設立し、キリンビールからの補助を得て加工施設と冷蔵庫を備えている波伝谷漁港で月一回日曜日に加工販売の活動をしている。たいがい後継者のいる世帯だということである。震災以来続けてきた「が

んばる漁業」も2017年度で終了となるので、その後のことを考えなければならないが、現状はやっと住宅ができたところであり、まだ今後について話し合



後藤清喜さん 戸倉合羽沢のおおしま荘で  
2016年9月12日

いをするというところまではいっていないというのが実情だということである。

震災の4、5年前までは地域でソフトボール大会や運動会、旅行などをやっていたが、趣味の個別化や生活の多様化のなかで、再開はなかなか容易ではないようだ、コミュニティがどう再生し復活するのか、人口が減っていくなかで、難しいが、若い世代が自発的に集まり、意見交換をし、協働することからなにか見えてくるのではないかと期待しているようだ。

丘の上に放置されたようになっている旧戸倉中学校について、尋ねたところ3億円をかけて一階部分を地区公民館として再利用し、二階部分は展示室、図書室にする計画が進められているということである。公民館として活用しながら、その建物に震災の記憶を保存するというのは、いいアイデアである。戸倉地区でも一步一步前に歩み始めていることが伝わってきた。2015年に戸倉の山林がFSC<sup>8</sup>の認証を受け、2016年には戸倉のカキがASC<sup>9</sup>の認証を受けたという話も教えてくれた。これも将来に向けて前

8 FSC (Forest Stewardship Council) 森林管理協会の認証制度で、WWF (World Wide Fund for Nature) 世界自然保護基金が世界的な持続可能な森林の利用を推進するために、普及推進している認証制度。森林の管理や伐採が、環境や地域社会に配慮して行われているかどうかを、信頼できるシステムで評価し、それが行われている森林を認証する。その森林から生産された木材や木材製品(紙製品も含む)に、独自ロゴマークを付して市場に流通させている。

9 ASC (Aquaculture Stewardship Council) 水産養殖管理協会の認証制度で、やはりWWFが推進する活動であるが、支援資源の持続可能な利用を補いながら、環境に大きな負荷をかけず、地域社会にも配慮した養殖業であることを認証し、責任ある養殖水産物であることがわかるようにエコラベルを添付して、市場や消費者に提供する。

向きにやっ払いという気持ちの表れであり、明るいニュースである。

戸倉地区には、波伝谷に伝わる「本吉法印神楽」や「春祈祷」、水戸辺の「行山流水戸辺鹿子躍」といった伝統民俗芸能がある。他の地区でも、入谷地区には八幡神社例祭で行われる「神輿渡御」と「打囃子」、歌津地区には伊里前の「獅子舞」、石浜の「石浜神楽」、泊浜の「ふるだ舞」と「泊浜獅子舞」、菰の浜の「菰の浜獅子舞」、寄木の「ささよ」がある。それぞれ地域の神社仏閣の例大祭や年中行事として営まれてきた。いずれも人口減少のなかで存続が危ぶまれる可能性があるが、むしろこうした民俗文化をなんとか継承し、地域再生のきっかけにしてほしいものである、長い歴史をもち、各地域の生活

文化やコミュニティ生活の拠り所となっている。それだけに地域の人びとにとっては、欠くことのできない生命の泉である。

こうした祭りはそれぞれの地域での年中行事の一環して行われてきているが、それとは別に年に一度、夏祭りのようなときに、震災で犠牲になった人びとの鎮魂と復興祈念の祭として、南三陸町内で一堂に会するというのもよいのではないだろうか。町内全体の復興の足がかりになるのではないだろうか。祭りは地域の生活の活力源である。祭りがあるところでは、震災のような破局が訪れたときに、協働的な自力救済の力が発揮されると言われる。震災直後の南三陸の人びとの行動にもそれは表れていた<sup>10</sup>。

## むすび つぎの5年に向けての中間考察

交通インフラや港湾施設等産業インフラの整備、嵩上工事、防災集団移転事業などの計画実施が完了しつつある。これからいよいよ実際の町づくりが始まる。将来に対するさまざまな不安と期待が交錯しているというのが現状である。実際の町づくりがどのように進行し、どのように復興の歩みが一步一步すすんでいくのかは、まさにこれから始まることであり、被災した町民の新生活が安定したものになり、震災復興に大きな区切りがつくまでは、すくなくともさらに5年は要するであろう。われわれの定点観測もそれまで継続しなければ、一区切りはできないのではないかと感じている。そのさい今後どのような点に着目して観察していったらよいだろうか。今後重要になってくる点は、少子高齢化と人口減少の

なかでいかに日常生活の基盤を持続可能なものにし、地域再生を遂行していくかという点であることは言うまでもない。ここでは新たな5年に向けて、今後の観察ポイントをあげておきたい。

まず第一に、日常生活におけるネットワークがどのように再構築されていくかという点である。3.11以後沿岸三地区のもっとも基礎的な生活ネットワークの基盤が破壊されてしまった。しかし人的ネットワークは損傷をうけながらも残った。モノはなくなったが、人は残ったとも言える。高台移転後、旧来のネットワークを生かしつつ、新しい環境で再編成しなければならないという難しい課題に直面している。高齢者が増えていくなかで、それを進めなければならぬ。誰もが生涯それぞれなにかしら生き甲

10 祭りも契約譚も日常生活ではあまり表面にはでない。そもそも祭りは非日常的なものであるし、契約譚も緊急のための互助組織的性格をもっている。しかし日常のなかにあつて非日常の営みとしての祭りを支えている中心的ネットワークはやはり契約譚を基礎とするネットワークないしその記憶であろう。それが非常時におけるフットワークと協働体制の源といえるような気がする。もっとも人びとはどの地方の人であったとしても、それぞれさまざまな生活ネットワークをもって生きているので、契約譚や祭りのネットワークはさまざまなネットワークの一つにすぎないものとしか感ぜられなくなっているのかもしれない。しかし消滅の途にあるのではなく、表面から見えなくなっただけなのかもしれない。過去においてもそれは時代とともに形をかえながら伝えられてきたものであろうし、今後もそうであろう。伝統の可視的な墨守ではなく、伝統が目に見えない形で現代に生かされることによって継承されるような性質をもっているものなのかもしれない。だから長らく途絶えて忘れられていた祭りや祭礼がちょっとしたことをきっかけにしてよみがえるというようなことが起こるのである。行山流水戸辺鹿子躍の復興の物語はその一例である。

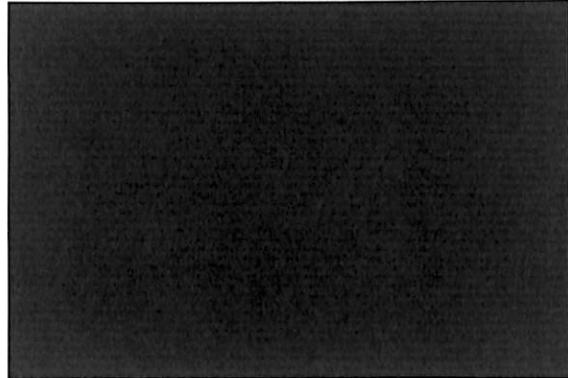
斐をもって生きていけるような、そして隣人となにかしらの人間な関係をもって生きてゆける地域生活環境をつくっていくことが、大切である。こうしたありふれた、あたりまえの血の通ったコミュニケーションは、じつは日々の生活のなかでの人付き合いの積み重ねからしか生まれてこない。それが内に閉じているのではなく、外に向かって開いていることが重要である。開いていることによって、内からの活力が内部で循環しつつ、外に向かって展開する。

第二に、漁業がこの地域の中心を占めているが、今後町内の雇用、商業、農業、工業、観光とどのようにあらたな連携をとっていくか。従来の蓄積のうえに、新しい環境を生かすさらなる工夫が求められるのではないだろうか。震災前と以後とを比べれば、三陸自動車道志津川ICの開通は輸送インフラの点で画期的である。その可能性を見据えて、漁業を中心とした町内産業の有機的連関構造を構築すべきである。そのことが従来は考えることすらできなかった新しい可能性を引き寄せる引力になるのではないかと期待する。

第三に、農業が単独ではなかなか自立できないことはいまに始まったことではない。しかし零細ながらも、菊、大豆など独自の地域産品はある。大豆は、納豆、豆腐、味噌、醤油など日本人の食生活の基本となるものの原料であり、需要の持続可能性は高い。独自の付加価値をどこに見いだすかが、今後の可能性の最大のポイントである。

元歌津町長の牧野駿さんによれば、宮城シロメという大豆は歌津の特産大豆で、袖浜から歌津にかけての粘土質の土壌でよく育つのだそうだ。大豆だけでなくネギなども土質をよく調べて栽培すれば、特産品の候補になりうる。農業をやる若い人を、経験者や農協がサポートしながら、育てるということを、いまからでもやってみてはどうかだろうか。ほんとうに良質のものを生産すれば、関心をもつ業者はかならず現れるし、消費者は良質のものには相応の代価を支払って購入しようとする。また最近では販路は国内だけでなく、海外にも広がりつつある。決め手は品質である。優れた商品には、市場のほうで

宣伝してくれるのが現代である。商品として独自の価値をもつものを生み出していく努力をすれば、規模は小規模でも、兼業でも、持続可能性が見えてくるのではないだろうか。それに関連して、6次産業化という発想は、有効である。



牧野駿さん 歌津伊里前 自宅 2016年9月11日

耕作が放棄され雑草に覆われている田畑を見ることほどつらいものはない。日本の農村風景の美しさを保っているのは、手入れの行き届いた田んぼと畑である。日本の環境保全の大本はここにある。じつは森林についても同様のことが言える。森林も、植林、伐採だけでなく、まめに手入れをすることによって維持される。自然環境は放っておいては荒れることはあってもけっして維持されえない。海と漁業についても同じことがいえそうな気がする。環境の美しさは、自然の造形力だけによるのではない。生活に結びついた人為的な保全の営みによって維持されているのである。南三陸の観光資源としての自然環境は、長年にわたって漁業、農業、林業を営むなかでつくられてきたものであることを、思い起こすことが大切に思われる。

第四に、観光（ツーリズム）の可能性である。志津川湾はほんとうにすばらしい眺めである。神割崎から港までの浦々、岬、そして島々の眺めもほんとうに美しい。自信をもって誇れる自然景観である。内陸の入谷の田園風景も、眺めているとなにか安らぎのようなものを与えてくれる。神割崎から港まで海岸線に沿って旧来からある生活道路を活用して遊歩道（兼自転車道）を整備したらどうだろうか、きっと評判になるのではないかと想像したりする。同

じことは入谷の棚田や八幡川沿いを歩きやすくしたらどうだろうかと思像する。春の入谷はさながら桃源郷をおもわせるような趣きがある。それぞれの四季折々の風情は、土地の人には当たり前風景かもしれないが、都会暮らしの人やよその土地の人間には新鮮であり、かつ懐かしい風景である。田東山の5月のツツジは有名だが、田東山までのハイキング道路や田東山から水堀峠までの尾根道をハイキングができるように整備したらどうだろうか。南三陸町全体を自然公園として見立ててグリーンツーリズムとブルーツーリズムの拠点として設計するくらいの大胆な発想があってもよいのではないだろうか。戸倉、入谷、志津川、歌津の4つの地域の自然景観をつないで示すことができれば、随分とアピール力が違ってくるのではないだろうか。町内には由緒のある神社仏閣も少なからずある。それらをつないで散策ルートに重ね合わせたらどうなるか、それぞれの神社や寺は民俗伝統行事の舞台でもある。そうした年中行事は地域生活のアイデンティティの核であるが、それらは同時に観光資源としての価値も持っているということを強調したい。

さらに南三陸に限定するのではなく、周辺地域の観光資源との連携が必要であろう。仙台から見ての南三陸、盛岡や山形から見た三陸、東京からみた南三陸、見え方、捉え方が異なるはずである。どういう旅行計画をとるか、それぞれ異なるはずである。遠方からの客であればあるほど、ついでに見て回る観光地との関連を考えるはずである。南三陸の周辺には、仙台、松島、塩竈、石巻、女川というまとまったルートがある。さらには気仙沼、陸前高田、大船渡というまとまったエリアがある。一関エリアには平泉、狛鼻溪、巖美溪、栗駒山、須川温泉がある。登米、古川、鳴子温泉というエリアもある。狭く見れば観光地として互いにライバル関係になるかもしれないが、広く捉えれば相互補完的な関係にもある。近い将来、三陸自動車道が気仙沼、大船渡方面にまでつながり宮城県北自動車道路で登米から東北自動車道に接続するようになれば、東京方面からは大きなまとまった観光エリアとして捉えられることにな

り、そのなかでいくつものコース選択が提示されるようになるだろう。こうした観点から南三陸を位置づけ、アピールする努力が必要なのではないだろうか。そうした位置付けは、山形や岩手、秋田、青森方面からの観光客誘致にも大きな影響力をもつはずである。

観光を考えるうえで宿泊施設の充実と質の改善が求められる。震災直後は営業している民宿の数も限られていて宿探しに難儀した。いまではその頃に比べれば、ずいぶんと宿泊施設も増えたように見える。震災前からある大きなホテルの他に、研修用の宿泊施設や単身出張者用の宿泊施設もできている。震災前からあった民宿で震災後しばらくたってから再開したところもある。南三陸の民宿は、1990年代から2000年代にかけて、つり客で随分繁盛したようである。また海水浴の家族連れ客でもにぎわったようだ。津波の被害を免れた民宿のなかには、90年代までの民宿のつくりを偲ばせるところもある。それはそれで懐かしいのだが、現代の需要に果たして適合しているかどうかは疑問を感じるころなしとはしない。しかし経営者の高齢化と後継者の問題を抱えているところもある。震災で被害を受けたあと再開する民宿がそれほど多くはないのは、そうした事情が背景にある。そんななかでも、独自の考えで再建し、再開した民宿もある。うまくいっているところは後継者に恵まれているところのようだ、その点では漁業経営者でうまくいっているところと似ている。明確な営業方針をもって夫婦だけで小規模ながら魅力的な民宿経営を行っているところもある。いずれにせようまくいっているところには共通点がある。内部の清掃が行き届いており、清潔で、料理が丁寧でおいしいことだ。また地域の観光情報などのパンフレットや地図を客の目に入りやすいように置いている。

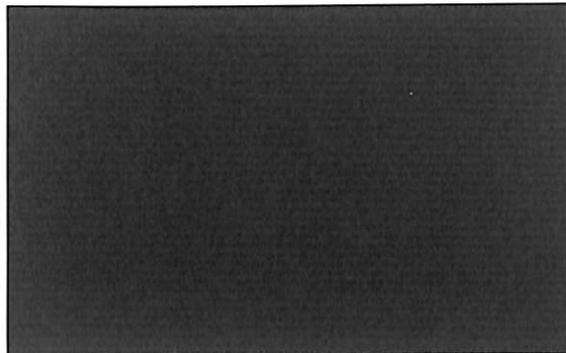
これまでいくつかの民宿を訪ねて見たが、浜辺で民宿を営んでいるところは、たいがい漁業権をもっており、田畑もっており、自前で魚介類も、米野菜も調達しているので、安いコストで、割安な価格でサービスを提供できている。そのメリットを生か

しつつ、ニーズにあったサービスの改善と工夫を絶えず行っていくことが重要であると思われる。共通基準を充たしつつも、横並びではなくそれぞれ独自のカラーを出して、个性的であることが、それぞれの民宿が存続していくための条件であろう。小規模の民宿が存続するための指標はリピーター客がどの程度あるかである。客の嗜好は多様である。すべてを満たすことはできない。どの点にターゲットを絞るかが重要であろう。共倒れを招くような競争は避けるべきである。いずれにせよ魅力的な民宿の存在自体が遠方からの顧客を引き寄せる重要な観光資源になることは確かである。それぞれの民宿のありかた次第で、南三陸の観光価値を高めれば、低めもすることになるのではないだろうか。インターネットでの情報提供という点ではまだまだ水準は低い。そこまで手が回らない民宿もあろう。町の産業振興課や観光協会はそうした側面を援助するのが役目であり、観光ルートの紹介と宿泊施設情報の提供を有効に結びつける努力をすべきである。

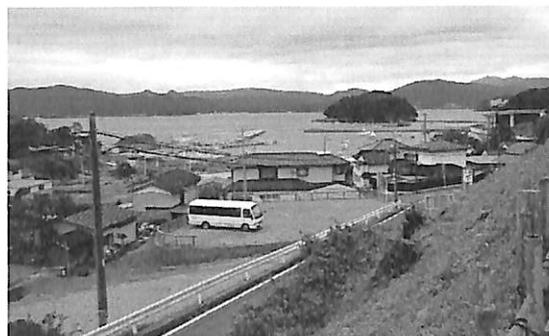
そんなことを考えながら、袖浜の下道荘の主人菅原長弥さんと戸倉合羽沢のあおしま荘の主人須藤勉さんにそれぞれのこれまでの経歴と経営方針、今後の展望を伺った。どちらも震災以前から民宿を経営していたが、震災で流され、震災後現在の民宿を新築した。

<袖浜 下道荘 菅原長弥さん>

高校を卒業後気仙沼の叔父のもとで3年半サケ・マスの遠洋漁業に従事した。減船になったので、船を降りて、1979年、21歳で結婚したがその年に民宿の営業を開始したというから、もう37年の歴史がある。父の代にはのりとワカメの養殖をしていたが、その後のりはうまくいなくなり、ホタテは長弥さんの代になってからはじめた。ご本人は商人になりたかったという。自分がつくったものを食べてもらう仕事をしたいと考え民宿を始めようと考えたようだ。当時すでに民宿は4、5軒あったそうだが、自宅のなかに民宿はどうかと思ひ、自宅とは別に、別棟として民宿を建てたというところに個性が伺われる。送迎バスをはじめて導入したり、カラオケを



袖浜 下道荘主人 菅原長弥さん 下道荘  
2016年9月10日



下道荘から袖浜、荒島、志津川湾、対岸は戸倉  
2016年9月13日

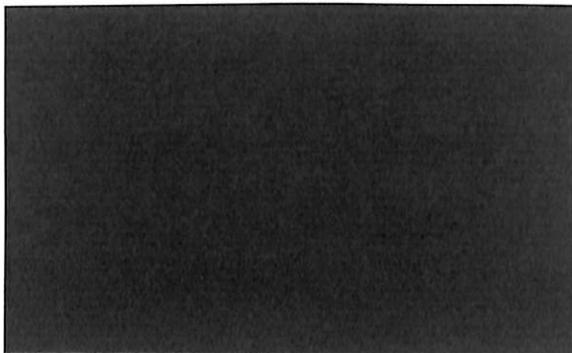
導入するなどして人気を呼び、順調に成長し、平成7年には新館を増築し、その後も経営は安定成長をつづけてきたと回顧。

震災直後は、漁業の復興という観点から海の掃除を行いつつ、民宿再建の可能性を探った。土地交換が成立し、用地確保の目処がたったので、2011年4月22日かつての民宿を撤去し、9月4日地鎮祭をし、造成開始。2012年2月17日営業を再開。規模は10畳5室、8畳2室 60人対応の食堂ということである。現在までのところ復興作業の業者関係の客が多いが、いずれ減少する。客数50人を維持しつつ、料理を看板にして、観光客の宿泊と地元の宴会場として期待に応える仕事をしたいと抱負を語ってくれた。眺めのよい場所なので、観光客に喜んでもらえるような展望浴室も計画しており、順調にいけば、4月に着工し、秋には完成の見込みだという。これからは観光客の誘客力がポイントだと読んでいます。

<戸倉合羽沢 あおしま荘 須藤勉さん>

1955年生まれで、津の宮に民宿を始めたのは1978年12月、22歳のときのこと。こちらは婿入りして、

漁師と民宿の兼業というかたちで始めた。震災前の部屋数と収容人員は6部屋31名の規模だった。かつては釣りばか日誌の影響もあってか、つりの接待客が多く、関東方面からも訪れ、ずいぶんとにぎわったそうだ。震災の年、57歳になったことだし、もう漁だけにして民宿は止めようかと、いったんは夫婦で話し合っていたそうだ。内陸の方にいい古民家が売りに出ているという話を聞いて、見に行ったりしているうちに、民宿用に移設しようかという気持ちになったとのこと。合羽沢の高台に移設して2015年夏に開業してまだ1年と半年しか経っておらず、庭の整備も現在進行中である。しかし建物の外観の雰囲気は独特の存在感があり、建物の内部はゆったりとしており、天井の高いすばらしい空間である。目立たないがかなり凝った趣向が随所に凝らされている。部屋数は3室16人収容ということである。夫婦二人でやっていくので、この程度で十分であるという考えである。



戸倉合羽沢 あおしま荘主人須藤勉・京子さん夫妻  
2016年9月13日

庭の隅には別棟があり、将来の隠居用だという。お嬢さんがいずれ戻ってきて家を継ぐことも射程に入れている。建物の端に会議室かカフェラウンジにでも使えるような空き室があるので、何に使うのかと尋ねたら、お嬢さんが戻ってきたとき工房として使えるように用意したということである。いろいろとよく考える主人のようだ。庭の裏にまわれば、志津川湾が眼下に見える。まわりに明かりがないので夜は天気がよければ星空がきれいだ。これはあきらかにリピーターにターゲットを絞った中長期的な経営戦略であろう。60過ぎの夫婦が二人でむりをせずに続けていくことを考えれば堅実な発想だといえ

る。ここは部屋の中で過ごしてもゆっくりリゾート気分を味わえるつくりになっている。現在では小さな魚をとる刺し網漁をやる人が、3人に減ってしまい、定置網が主流になってしまい、地魚の種類が少ないのが難点だとこぼしていた。これも震災後漁師が減ったということによる変化であろう。

震災前の状態に単純に戻ることは不十分である。この5年間に大きく環境は変化している。新しい状況を見据えて、それぞれの立場からの工夫と努力をすることによって、その相乗効果が全体として南三陸町のツーリズムの商品価値を作っていくことになるのではないだろうか。

沿岸低地（志津川、伊里前）の商店街は、津波によって壊滅し、一年後仮設商店街を立ち上げ、2016年末まで、復興の旗として、がんばってきた。低地の嵩上げが済み、2017年3月には、あたらしいかたちで、商店街が復活する。震災の爪痕がしだいに消えていくなかで、どのようにして今後の持続可能性を追及していくのか、これから5年、その進化の様子を観察しつづけることは、南三陸の地域再生の可能性を考えるうえで、これまでの5年間以上に重要である。「被災地」という言葉が人びとの記憶から薄れていっても、3.11の経験を忘れずに未来への肥やしとして、生き生きと営みを続けられる商店街にどのようにつなげていけるのか、うまくそこに向かって進んでいけるかどうかを試される5年だからである。

ここまでは箱モノ行政的なインフラ再構築の時期であった。これからの5年は、人を中心にした地域生活の再構築の時期になる。世の中も震災の圧倒的なインパクトの中で復興作業に理解を示してきた。しかし復興関連の予算も減り始めてきている。世間は東京オリンピックに向けて動き始めている。それとともに人びとの震災の記憶と被災地への関心は後退していくであろう。被災地自治体の行政財運営もこれまでのようにはいかないことはすでに当事者自身が認識しているはずである。独自の行政努力が求められるゆえんである。そうしたなかで、一万人余の町民は、南三陸に根を張って生きていこうとして

いる。これからの5年を将来の展望を切り拓くかたちで乗り切ってほしい<sup>11</sup>。

#### 参考資料

『南三陸町の復興とこれからの歩み』南三陸町企画課、2016年3月

『復興まちづくり 宮城県南三陸町志津川地区 紹介資料』南三陸町復興市街地整備課・UR都市機構南三陸復興支援事務所、2016年7月1日版

『東日本大震災からの復興～南三陸町の進捗状況』南三陸町企画課、平成28年9月版。

11 これまで5年にわたって夏冬年2回毎回4泊前後の調査だったが、都合10回、現地調査を重ねて来た。定点観測は場所だけではなく、話を聞く相手についても同じ方法を適用した。はじめの一年半はあまり変化がみられなかった。そのあとの一年半は徐々に復旧工事の進捗をかんじられるようになった。この一年半は、その結果が目に見えるかたちで捉えられるようになった。調査のたびに土地の空気を吸い、土地の食べものを食べ、多くの人に話を聞いた。最初は土地勘もなく異邦人さながらだったが、調査をくり返すうちにいつのまにか地元の人びとの感覚や地元のネットワークについても多少わかるようになってきた。外部からは見えない内部におけるつながりやしきりがあることにも理解がおよぶようになった。皮肉なことだが民主党政権下では震災直後ということもあってか復旧工事の進捗状況ははかばかしくなかった。民主党政権だったからとはかならずしもいえないだろう。しかし自民政権になってから復旧復興にむけての動きがよくなったような印象を受けた。これはきちんと検証しなければならないことだが、ここにも計画、実施過程における中央政府・地方政府・自治体・関連諸団体の意思疎通の問題が潜んでいるように思われる。

付録 東松島市野蒜と石巻市日和山の視察

第9回南三陸調査の初日9月9日は、南三陸に向かう途中、東松島の野蒜と石巻の日和山公園に寄り、震災後5年後の様子を視察した。

2015年5月30日JR仙石線の高城町～陸前小野間が再開し、全線復旧した。その区間のなかにある野蒜駅と東名駅はあたらしい路線計画に基づいて高台に移転し、両駅の線路伝いに防災集団移転事業の住宅団地用の造成が行われた。その高台から下の海岸よりに津波を冠った(旧)野蒜小学校や(旧)野蒜駅がある。野蒜海岸は、夏の海水浴場として有名であった。野蒜地区は住民4,600人のうち野蒜小学校児童9人を含む515人が津波の犠牲になった。指定避難所だった野蒜小体育館も津波に襲われ、すくなくとも住民ら13人が亡くなった。

142年の歴史をもつ野蒜小学校は2016年2月27日に小野地区体育館で閉校式を行い、小野市民センターで3月18日最後の卒業式を行った。2016年4月からは宮戸小学校と統合し、宮野森小学校となった。高台移転地の一画に2015年10月から建設工事を行っ



新しい野蒜駅 2016年2月13日



野蒜駅前の高台移転用地の造成工事 2016年2月13日



(旧)野蒜小学校 2016年2月13日

ていた新校舎がこのほど完成し、2017年1月10日、生徒たちは新校舎で三学期を迎えた。宮野森小学校の新校舎と野蒜駅は、(旧)野蒜小学校脇の道路を西に向かい、小学校の裏の山を越えた高台にある。



(旧)野蒜駅 駅構内の線路とホームだけが、夏草に覆われて、残っている。新しい線路と駅は、左後方の山の裏の高台移転地に移された。

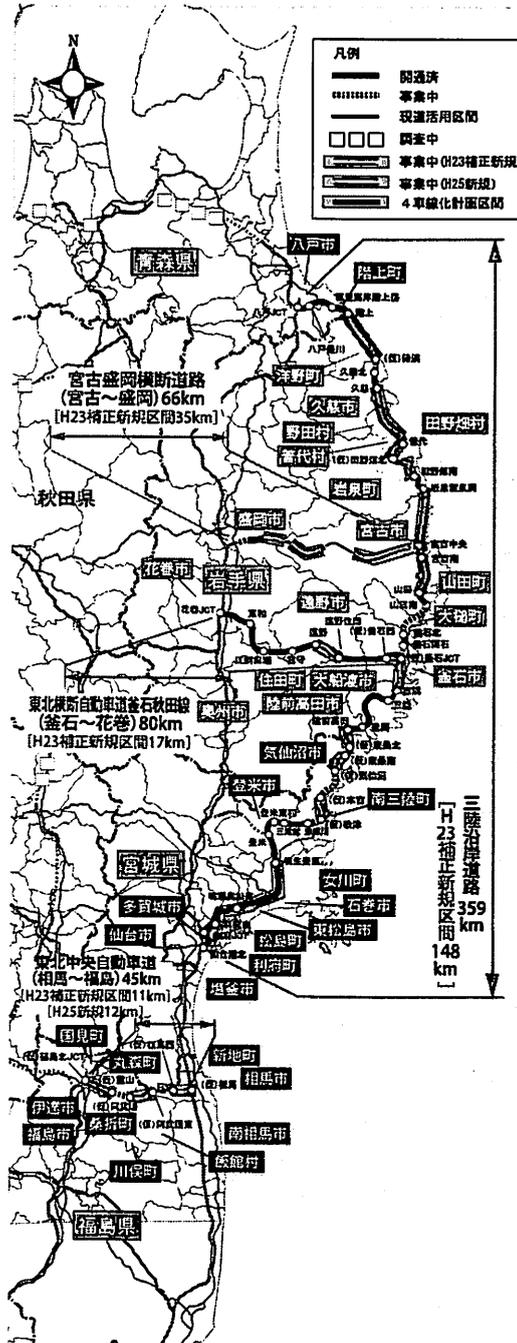
2016年9月9日



石巻市内の真ん中にある日和山は、市内をぐるりと一望できる景勝地である。震災のときは多くの人が避難場所としてめざした。上の写真は、石巻市日和山公園から門脇・南浜方面の現在の様子である。震災前は住宅が3,000以上の人家があったが、すべて津波で流され、津波火災によって焼尽した。震災後は災害危険区域として居住できなくなり、夏は、ただ雑草の緑だけがひろがっている。

2010年9月9日

図2 復興道路・復興支援道路全体図

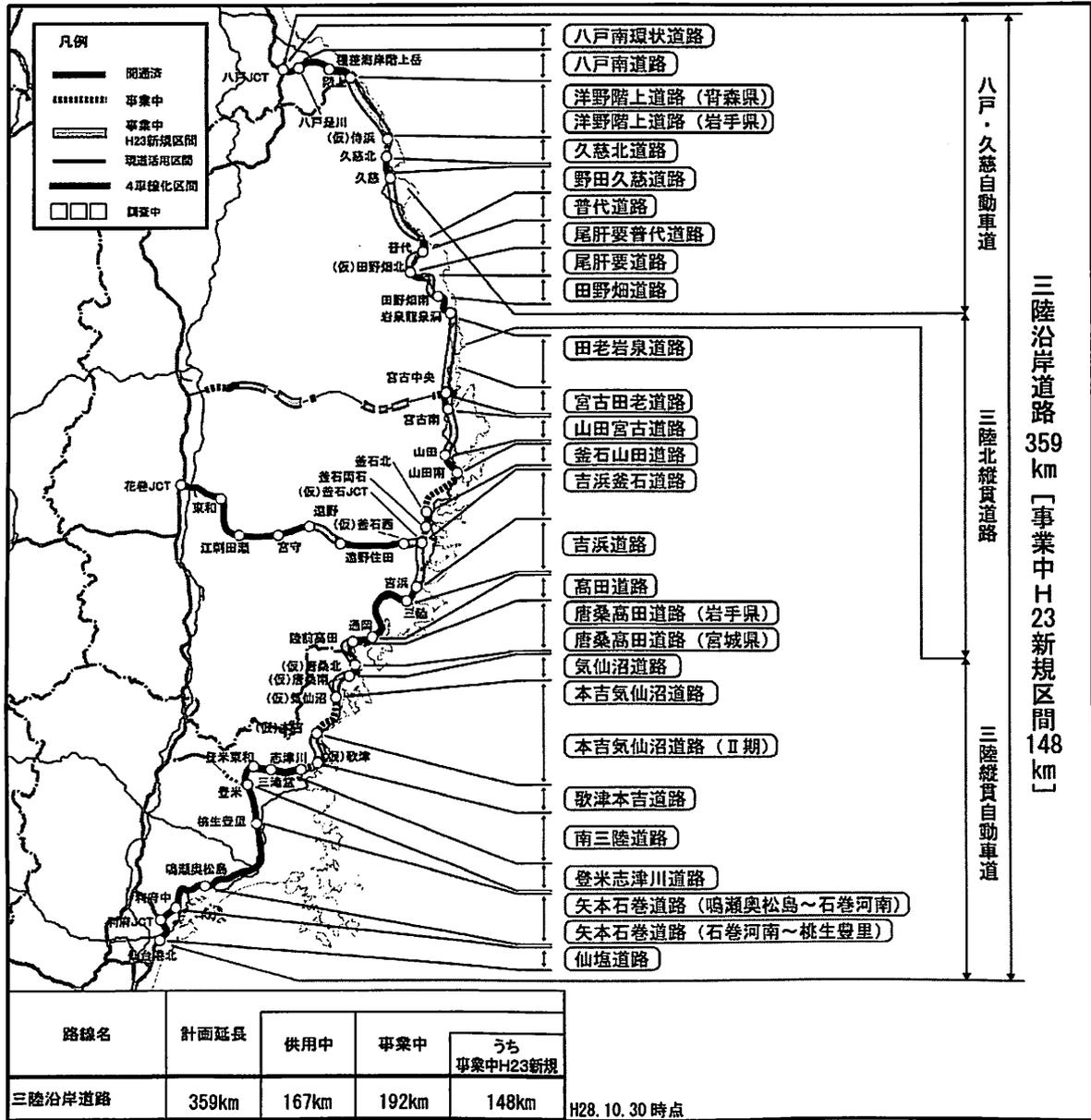


復興道路・復興支援道路の総延長550km  
 H23 補正新規区間223km (41%) H28.10.30時点

路線名	計画延長	供用中	事業中	うち	
				H23補正新規	H25新規
三陸沿岸道路	359km	167km	192km	148km	—
宮古盛岡横断道路	66km	24km	42km	35km	—
東北横断自動車道 釜石秋田線	80km	63km	17km	17km	—
東北中央自動車道	45km	0km	45km	11km	12km
合計	550km	254km	298km	211km	12km

出典：国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
 (<http://www.thr.mlit.go.jp/road/fukkou/index.html>)

図3 三陸沿岸道路（岩手県・宮城県）



出典：国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所 (<http://www.thr.mlit.go.jp/road/fukkou/content/road/sanriku/>)